施工者に幸あれ 第79回

構造の詩人

構造家・増田一眞

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco

■道理

ぼくの名前は増田一眞
いっしんではなくかずまといいます
一眞は一心に通じる

構造家・増田一眞さんは，豊かな語彙で心の内を表せる才人。『一眞のほろ酔い随想』（文芸社）にはそれが溢れている。

1934年に広島に生まれ，今も朝7時着で電車通勤する。事務所を手伝う三女の文（あや）さんは，ラッシュ前に帰宅させるのに苦心するといって笑う。

「中学三年の頃にはもう一人前の顔をしてタウトの『建築芸術論』を読んで建築家を志していた」（『一眞のほろ酔い随想』より）という。東京工業大学で，建築の一番基本となるものだからと構造を選んだ。松村組に数年勤務した後，東京大学生産技術研究所の田中尚研究室へ。時代的に構造設計はまだまだ下請けの立場ではあったが，仕事は山ほどあり自然に独立した形になったといいます。

高田馬場の事務所では畳に座って仕事をし，奥様が酒と肴を編集者に振る舞った。当時，彰国社の田尻裕彦編集長と新人編集者だった覇志堂もその恩恵にあずかる。

そして，1984年発行された『かたちのデータファイル』（高橋研究室 編，彰国社）の第4章には，増田さんのぶれない発想の道理が詰まっていて今も教科書なのです。高橋公子さん（建築家，1997年没）の住宅論など話は尽きない。

賞の受賞も数々あるが，【構造設計者としての実績を踏まえた木造設計に関する社会的教育の長年の業績】で日本建築学会教育賞を受けたのが2015年。「わが国には職人たちに受け継がれてきた素晴らしい木造建築技術があった」から始まる受賞の文は，大工になるのが夢だったという構造家にして書ける木構造の指針となるものです。

■原点

増田さんが今言いたいことは，「間伐材を主架構に活用せよ」。天竜原木センターの設計では鉄骨造をという依頼に，間伐材を使ってはどうかと提案した。確かに道理に叶っている発想なのだ。

増田さんの設計はラインの美しさと覇志堂がいえば，発想の原点はカゴのような設計，細い竹ひごで組合せ，必要なものしかなくて，加工も最小限，それ以外の構造なんてやる気がないと断言する。

坪井善勝先生の発想の豊かさを尊び，今の構造家では「川口衞さんや若手の山田憲明がいいと思う」と語る。弟子だからと山田憲明さんを評価しているのではないことがわかる。どのように社会とかかわって設計しているかを厳しく冷静に見ているのだ。

■詩歌

玉ねぎの芯にある芽になぞらえて，人が晩年になるほど突き上げてくる，次の生命の芽を育む喜びと人生の永い道程全体のことを，万感の愛情を込めて詩っている。稚拙に言い表すより構造家・増田一眞さんの言葉を尊敬を込めて掲げたい。

「私は己が天職として，建築の骨格を定める構造設計なる，凡そ世の脚光を浴びることのない地道な仕事を選んだが，創り出す構造の形態をムダのない美しい形態に迄高めようと，全情熱を捧げた。構造は美しくなければならないというのは自らに課した命題だから，私にとっては構造こそが詩歌であったと言える」。